病院別のがんの生存率の公表～英国の事例の紹介～

森島 敏隆 専門委員
大阪国際がんセンター　がん対策センター　政策情報部

患者が診療を受ける病院を選択するときの参考となるように、各病院の治療成績の開示を推進するか否かが、がんの分野に限らず活発に議論されている。開示がわが国に比べて進んでいる先進諸国の1つである英国に筆者が医療の質の測定・改善を研究テーマとした留学経験があるということで、J-CIP委員の伊藤ゆり先生の推薦を受けて「英国における病院評価や施設別データ提示の事例紹介」の講演をした。

講演のようす

英国では診療所や病院別の治療成績や患者満足度などを公的なウェブサイトで開示している。患者向けを意図したサイト(NHS Choices)ではTripAdvisorのようにわかりやすく、をモットーに定性的評価を多用し、詳しい情報を欲する業界関係者向けを意図したサイト(My NHSやNHS Digital)ではがんの生存率などをCSVファイルでダウンロードできる。↗

↘開示する目的の1つは前述のように患者の主体的な病院選択のためである。では英国の患者はさぞ、より良い治療成績の病院を求めて渡り歩くのだろうと想像したくなるが、必ずしもそうでないことが各種調査で明らかになっている。それでもなぜ治療成績を病院別に開示し続けるのか。医療機関の自発的な医療の質向上活動を奨励するためでもあるし、公費で運営される医療機関が政府・国民への説明責任を果たすためでもある。これらの目的のほうがむしろ、より重要かもしれない。

治療成績の開示には弊害もある。その1つが病院のランキングになってしまうという懸念である。臨床的に有意でない数値の大小が順位を決めてしまいかねない。それを克服する見せ方として、ファンネル・プロットによる視覚化が2000年代半ばから使われ始めた。この見せ方ならランキングには見えない、施設の症例数の多少に起因する偶然誤差もよくわかる、という利点がある。生存率のような定量的評価を患者向けに見せるときにはこのような視覚化が主流になりつつある。

がん患者学会2017 J-CIP セミナーのご報告

天野 慎介
一般社団法人全国がん患者団体連合会　理事長

全国がん患者団体連合会では、全国のがん患者団体が集まり、がん対策の課題について学び、患者団体が取り組むべきことについて議論することを目的として、「がん患者学会」を2015年より開催してきました。過去2回は、がん研究振興財団や日本がん治療医認定機構などと共催してきたところ、2017年は日本がん登録協議会共催により大阪国際がんセンターでの開催となりました。今回は「J-CIPセミナー」と題して片山佳代子先生(神奈川県立がんセンター)と天野が座長のもと、「施設別データを読み解くための統計的基礎知識」について伊藤ゆり先生より、「英国における病院評価や施設別データ提示の事例紹介」について森島敏隆先生(大阪国際がんセンター)より、それぞれご講演をいただきました。

伊藤先生のお話では、生存率を読み解く際のポイントとして「どのような患者を対象にしているか」という観点から、調査の母集団について見ることの必要性や、「生存率が高ければ良い↗

↘というわけではない」という観点から、生存確認の方法や調査対象の人数について見ることの必要性などについてお話いただきました。がん登録に関わる医療者からみれば「ごく当たり前」のことですが、患者や家族は数字に惑わされることも多く、統計データの有用性と限界について理解する機会となりました。

森島先生のお話では、イギリスのNHS(National Health Service、国民保健サービス)の下での医療提供体制についての説明の後に、ホームページ「NHS choices」を通じて医療機関の診療体制や設備のみならず、「ユーザーの格付け(5段階評価)」に関する情報や口コミについても閲覧が可能であり、この取り組みを通じて患者への情報提供のみならず医療の質向上を目指しているとの事例を紹介いただき、海外の先進的な取り組みを学ぶ機会となりました。最後になりますが、開催にあたりご尽力をいただいた講師や座長、日本がん登録協議会関係者の皆さまに厚く御礼申し上げます。